

## 「言葉で伝え合い、考え、議論する」道徳教育の開発 ―受け入れられない「ごめんね」を伝え合う―

伊藤 理絵 (常葉大学 保育学部 准教授)

**1. 研究の背景と目的** 本研究では、子どもが「ごめんねーいいよ」ができない時や受け入れられない「ごめんね」を経験している時の葛藤(ジレンマ)を語り合うことが、考え、議論する道徳教育に繋がっていくと仮定し、幼児教育から小学校教育にかけて、「言葉で伝え合い、考え、議論する」道徳教育の連続性のある幼小接続教育(年長児～小学1年生の2年間)の教材及び指導法を開発することを目的とする。なお、本研究は、常葉大学倫理審査委員会の承認を得て行った(受付番号22-7)。

**2. 実践者との協働的な教材開発** 年長児と小学1年生の共通教材として、協力園で実際に起きた泥団子エピソードを教材化した。教材化と授業の検討は、小学1年生の授業実践者と教材・授業開発協力者の小学校教諭2名と協働的に検討した。大事にしていた泥団子が壊れて悲しく、謝罪されても何も言えなかった気持ちが伝わるストーリーになるようにし、「ごめんね」と言われても何も言わなかった理由と気持ち、この後どうしたらいいかを考え、議論するための問いを立てた。



加えて、受け入れられない思いを伝え合い、考え、議論する道徳教育を実践するためには、子どもと保育者・教育者のダイナミズムを保障すること、つまり、子どもと実践者それぞれの内的世界の多様性を保障することが重要であると考え、非可逆的な時間の流れを記述できる TEM(複線径路等至性モデリング)の概念を活用し、実践者と研究者が協働的に教材・授業開発を行うための研究方法を提案した。

**3. 小学1年生と年長児への実践** 担任の保育者・教育者による実践を行った。子どもたちは、「ごめんね」と言われたら「いいよ」と言うものであるという規範を理解していた上で、泥団子教材の登場人物であるこうた君が、じゅん君に「ごめんね」と言われても言えなかった気持ちに共感し、「いいよ」と言えないほどの何らかの思いをもっていることを感じていた。小学1年生では、子どもたちが複雑な感情を真剣に考えている発言が見られ(例:「何も言えないということは、嫌だったとか悲しかったとか、いろんな気持ちがあると思うから、その宝物が壊れちゃった時は、こうた君は嫌なのか、悲しかったのか分からないほどの悲しさだった」)、作り直しても元の泥団子に込められている思いが違うことを述べていた。年長児では、大事な泥団子が壊れた悲しみを共有した上で、作り直すことを提案していた(例:「泥でくっつける」「友達に残っている泥で作るのをお願いします」「じゅん君に作ってもらおう」)。

**4. 総括と今後の課題** 保育者・教育者と子どもとの相互作用の具体的な様相や、保育者・教育者との振り返りについて詳細に分析することが課題として残っているものの、本研究を通して、幼小接続期における道徳教育として、泥団子エピソードを共通教材に“受け入れられない「ごめんね」”について言葉で伝え合い、考え、議論する保育・教育の可能性と、実践者と研究者が協働的に教材・授業開発を行う研究方法の展望が拓かれた。一方で、“受け入れられない「ごめんね」”を言葉で伝え合い、考え、議論するためには、聴者ベースになりがちな「考え、議論する道徳」の見直しとともに、子どもが安心して話せる関係性と時間と場の保障、現実的で自然な課題を、いかに公的な教育・保育の場で実現できるかを旨とすることが重要であることが示唆された。

## 【本研究の主な成果】

- 1) 伊藤理絵(2023)「幼児にとっての“公平な”解決: 納得できないじゃんけんの事例から」常葉大学保育学部紀要(10), pp. 79-86.
- 2) 高嶋由布子・伊藤理絵(2023)「ろう・難聴児の就学前教育と支援の現状と課題—社会性の発達に着目した“特別支援保育”のあり方の検討—」乳幼児教育・保育者養成研究(3), pp. 3-23.
- 3) 伊藤理絵・友永達也・宮本誠一郎(2024)「TEMを活用した実践者と研究者による協働的な教材開発の検討」常葉大学保育学部紀要(11), pp. 93-104.
- 4) 無藤隆(監修)・古賀松香(編著)(2024)『主体としての子どもが育つ 保育内容「人間関係」』(担当範囲:第4章「人と社会の間でよりよくあろうとする」 pp.65-82, Topics2「ルールの指導: 時間を共に過ごす者として」 pp.83-84